

#### 4. 鳥類の病原体に対する研究課題と研究体制

(村田浩一)

今回の高病原性鳥インフルエンザ問題で日本鳥学会会員各位が痛感したのは、野鳥の病原体に関わる知識の不足、とくに科学的情報の不足ではないかと思う。野鳥が国内各地の養鶏場における高病原性鳥インフルエンザの感染源となった可能性を探るには、まず本邦における各種野鳥の鳥インフルエンザウイルス保有状況や、その季節的および経年的変動ならび感染率の地域的相違などを、前もって把握しておく必要があった。もし、それらの情報が十分に提供されていたならば、国民はもっと冷静に対応できたかもしれない。しかし、これまで、野鳥が保有する病原体を対象とした監視調査（サーベイランス）が、国内全域において長期的かつ組織的に行われたことは殆どなかった。今後、ヒトと野鳥が共存してゆくためには、高病原性鳥インフルエンザに限らず、広く鳥類の感染症とくに人獣共通感染症（ズーノーシス）を対象とした、決して一過性に終わらない地道な調査および科学研究が求められる。

本来、野生動物の感染症に関する調査・研究は、国立の『野生動物医学研究所』のような専門施設が設置されて行われるべきではあるが、当面は、鳥学や感染症に関わる各種学会、NPO、大学や研究施設等の専門機関等が協同して、全国規模のモニタリングシステムの構築に努める必要があろう。将来的には、医学分野で試みられているような広くアジアを視野に入れた国際的鳥類感染症サーベイランスの実施も望まれる（Arita et al. 2004）。

具体的な今後の研究の必要性としては、当面の課題と将来的課題を含め、次のような内容が考えられる。現実的には困難な部分が多いかもしれないが、可能なところから早急に着手されることが望まれる。

##### （1）当面の研究の必要性

- 1) 養鶏場における高病原性鳥インフルエンザの発生および伝播が野鳥介在によるものか人間介在（物流も含めて）によるものかを究明する。とくに、輸入検疫時などの水際における家禽とその派生物（羽、骨などの副産物）の抜き取り検査のみならず、生きた鳥、愛玩鳥、鶏糞肥料、羽、敷き藁、餌、等の検査対象外品についての調査も検討する。
- 2) 感染鶏から野鳥への二次感染の可能性を解明する。
- 3) 野鳥から鶏への感染が強く疑われた場合、当該野鳥の鳥種を特定する。
- 4) 発生地を衛生動物（ネズミ、ハエ、蚊等）によるウイルス伝播の可能性について調査を行う。
- 5) 鳥インフルエンザウイルスを保有する野鳥に対する広範な調査を継続して実施する。

##### （2）将来的な研究の必要性

###### ★ 鳥関係者による研究の必要性－鳥類の渡り情報および斃死情報の蓄積

- 1) さまざまな病原体を保有する渡り鳥の渡り経路の解明に努める。
- 2) 連続または大量に死亡鳥（衰弱鳥を含む）が確認された場合は、それを確認した場所・日時（季節）・天候などの環境情報、および当該鳥の状態・種・性別・齢別・個体数などの生体情報を記録する、同一規格の記録用紙の作成。

3) 観察内容を発見地の保健所もしくは家畜保健衛生所等の公的機関に通報すると共に、特定の機関にその資料を蓄積することが望ましい。

4) 死亡鳥に関する収集・蓄積資料の解析を行う体制の確立。

5) 収集情報および解析結果は、鳥学会誌等で報告し、野鳥斃死情報の共有化を図る。

#### ★ 病原体関係者による研究の必要性－病原体の検索および記録

1) 病原体保有の調査・研究のための死体収集および各種材料（血液・糞・粘液・臓器等）の採取・保存に協力可能な専門機関の間で研究ネットワークを構築する。

2) 鳥学関係者による鳥類標識調査等の捕獲の機会を利用し、病原体保有確認の試料採取・検査を定期的かつ長期的に、上記ネットワークを通じて共同作業として行う。

3) 病原体は、動物由来感染症に関わるウイルス・リケッチア・細菌・真菌・寄生虫など幅広く対象とする。

4) 調査・研究のために採取した試料の長期的保存を組織的に行い、当該試料を必要とする研究者に随時提供して各種鳥類感染症の究明に生かす。

5) 調査・研究によって得られた成果を随時公開し情報の共有化に努め、鳥類感染症に関する科学的知識の普及と鳥類保全へフィードバックする。

#### (3) まとめ

高病原性鳥インフルエンザを含め、動物由来の新興・再興感染症は、今後も人間社会を翻弄し続けるであろう。そのたびに風評やマスコミ情報の氾濫によって人々が惑わされ、野鳥たちが敵視されるのは避けたいものである。今後も野鳥と親しく接することを望むなら、まず鳥に対する正しい知識を習得しなければならない。単なる情緒的なつき合いではすぐに破綻が生じることは、今回の騒動で多くの飼い鳥たちが無情に放棄されたことから容易に推測できる。幾度も同じ過ちやパニックを繰り返さないためにも、感染症も含めた鳥類に関する科学的情報を積極的に収集して公開し、ヒトと野鳥が共存できる道を示し、人々を正しく導いてゆく必要がある。

#### <引用文献>

- Arita, I., Nakane, M., Kojima, K., Yoshihara, N., Nakano, T. and El-Gohary, A. 2004. Role of a sentinel surveillance system in the context of global surveillance of infectious diseases. *Lancet Infect. Dis.* 4: 171-177.